

## カール大帝の修道院

小澤 実  
歴史家

Minoru Ozawa

標高一二〇〇メートルを超えるアルプスの麓、オーストリアとイタリアとの境に位置するスイス東部のグラウビュンデン州。そのミュスタイア渓谷の小村ミュスタイアに、ザンクト・ヨハン修道院はある。イエス・キリストに洗礼を受けたとされる洗礼者ヨハネに奉獻されたこのベネディクト会系修道院は、八世紀に建立された。一二世紀には女子修道院へと変更され、今なお修道女たちが静謐な生活を送る、生きた修道院である。他方でザンクト・ヨハン修道院は、カロリング期からロマネスク期にかけての貴重な建築、壁画、彫刻、ステンドグラスを現在に伝える文化遺産として、一九八三年に世界遺産に登録された。同じくスイスに七世紀に建立された、付属図書館と修道院の理想の姿を描いた平面図で名高いザンクト・ガレン修道院と同時の登録である。

ザンクト・ヨハン修道院は、クール司教座が統括する教会管区に所属する修道院である。修道院の歴史的位置を明確にするためにも、まずはクール司教座の歴史を整理しておこう。この司教座のある地域は、もともと、ローマ帝国を構成する属州のひとつ、ラエティア・ブリマにあたる。その属州の中心都市がクールであった。四世紀以降のゲルマン人の移動のうち、このクールに司教座が設置された。伝承で

は二世紀にイングランドから来た人物が初代司教をつとめたとされているが、史料で遡る限り、四五二年に最初の司教が就任している。当時はミラノ大司教座の管轄下にある属司教座であった。アルプスの南側、つまりローマ帝国の遺産を色濃く継承する地中海世界へとクール司教らの視線は向いていた。しかし八四三年のヴェルダン条約以降、ドイツにあるマインツ大司教座の属司教座となる。こうしてクール司教座は、アルプスの北側に成立した、森深い東法兰ク王国の一部となつた。

ミュスタイアにザンクト・ヨハン修道院が建立されたのは、このようにクール司教座の位置が大きく変化する、まさに中世初期の激動期である。四世紀以降、ドナウ川の東側に蟠據していたゲルマン人諸部族は、続々とローマ帝国のなかに移住してきた。クール司教座のあるラエティア・ブリマも例外ではない。当初は西ローマ帝国を滅亡させたオドアケル、その後はテオドリック大王の東ゴート王国がこの地を支配した。東ゴート王国の滅亡後、今度はメロヴィング朝の法兰ク王国がこの地の主人となつた。七五一年、法兰ク王国では宫廷革命がおこつた。宮宰という王家の家臣の地位にあつたビビンが、

代々メロヴィング家が繼承してきた法兰ク王位を篡奪した。カロリング朝法兰ク王国の始まりである。ただし、数多くあるゲルマン諸王国のなかのひとつに過ぎなかつた法兰ク王国が大きく変わるのには、七六年にピピンが死に、その息子が即位して以降である。息子の名前はカール、のちのカール大帝（シャルルマーニュ）である。五〇年近くにわたる王としての彼の生涯は戦争に次ぐ戦争であつた。国内のみならずイタリア、ドイツ、イスパニアなどへ遠征を繰り返す法兰ク王国は戦争国家として拡大を続けた。まさにこのような時期に、ザンクト・ヨハン修道院は建立された。建立者はカール大帝との伝承がある。

ザンクト・ヨハン修道院の初期の歴史については、さほど多くのことがわかっているわけではない。しかし、二つの事実をあげておきたい。ひとつは、ライヘナウ、ザンクト・ガレン、ブフェファースといった周囲の大修道院の祈禱兄弟盟約のリストに、ザンクト・ヨハン修道院も加えられていたことである。祈禱兄弟盟約とは、それぞれの修道院に所属する修道士たちのために、相互に祈禱を行うことを約する一種の契約である。修道士は、祈る人である。彼らに与えられた地上での仕事は、死後に天国に迎えられますようにと、人々の魂の安寧のために祈禱するのである。この盟約を通じて、修道院は、擬似的な兄弟となり、巨大修道院、とりわけ王家に所属する国王修道院を中心におくネットワークを構成する。

そのネットワークは王家の支配領域を超えて、ヨーロッパに広がつて行った。ザンクト・ヨハン修道院も、まさにこうしたネットワークの一部となつっていたの

である。

もうひとつは、八〇六年の現地諸侯とクール司教座との間での財産分割において、ザンクト・ヨハン修道院が、カール大帝に直属する国王修道院といふ帝国の「私有財産」となったことである。国王修道院は、現地の諸侯に対する貢納の義務から解放される。他方で国王修道院は、国王に対し直接の貢納義務を負うとともに、国王関係者を受け入れる、もしくはスタッフを供給し、国王が支配領域を巡行する際に、糧食と宿泊施設を提供する。戦争国家として拡大を続けるカールの王国は、常に統治のスタッフと支配の拠点を欲していた。かくして、静謐な修道院といえども、自ずと国王との関係は深くなる。

さて、ここで、カール大帝による、修道院改革の一端を振り返っておこう。私たちが高校世界史教科書で知るカール大帝と修道院の関係といえども、アーヘンを中心した古代文化の復興を目指した「カロリング・ルネサンス」という文化復興運動である。ヨーグ出身のアルクインという人物をアーヘンの宫廷に招き、その後、アルクインはトゥール司教座で聖職をつとめながら、同市のサン・マルタン修道院とう、フランク王国にとって非常に重要な修道院の修道院長として八〇四年に生涯を終えた。北からやつてきたこの知識人は、九世紀のフランク王国に知識の光をもたらした。彼のプログラムに従つて、数多くの写本が修道院写字室で書写された。カール大帝は戦争で領地を拡大したが、アルクインは写本で知識を拡大した。

フランク王国の拡大とカロリング・ルネサンスは、前進するカール大帝にとって二つの車輪であった。

両輪は、同じ速度で回転して初めて機能する。カール大帝はその統治のために、修道院に対してもある方向性を持つ政策を投げかけた。

ひとつは、カール大帝が、西方修道制の父である聖ベネディクトの戒律を復興させたことである。戒律とは、修道士自身の生活を規定する決まり事であり、修道院運営にとって最も重要な理念である。

実のところ、カール大帝以前、フランク王国各地の修道院で採用されていた戒律はまちまちであった。もちろんいざれの修道戒律も、ベネディクト戒律を

出発点にしたことは間違いない。しかし、ヨーロッパ各地域の姿が多様であるように、いざれの修道院も修道院長が培う個性を持っていた。カールは、聖ベネディクトが開基したモンテ・カッソノ修道院において、最も純粹な形の戒律を筆写するように命令を出した。しかるのちに、その写本は、ザンクト・ガレン修道院に保管されることになった。このことによつて、アルプス以北のドイツ地域の中心に、

ザンクト・ガレン修道院が建つことになつたのである。ベネディクト戒律に立ち戻ろうとするこの動きは、次世代の修道院改革のリーダーであるアニアースのベネディクトに継承される。

もうひとつ、フランク王国時代の修道院に関して、私たちには大きな遺産を手にしている。それは、ザンクト・ガレン修道院に保存されている、修道院平面図である。祈りのための教会堂だけでなく、修道院の居所、食堂、施療院、作業所、写字室、厩舎、養

魚池、薬草園など、それだけで年間を通じての生活を可能にする要素が全て詰め込まれている。九世紀に作成されたこの平面図は、初期中世の修道院のあり方を知るために不可欠の資料である。しかしこれは実際に建設された修道院の平面図ではなく、修道院とはかくあるべしとされた理想的な修道院の平面

図である。なぜ、このような平面図が作成されたのか議論はあるが、カール大帝によるベネディクト戒律の復興と同じ時期に作成されていることを考慮すれば、やはりカール大帝による大きな意図のなかで作成されたのだと考えるのが自然であろうか。理念としての戒律と理想としての祈禱空間を示すことで、新しい時代の修道院はかくあるべし、と。

イングランドやアイルランドから先進的な修道士を招聘したフランク王国は、カール大帝の時代にあって、「信仰共同体としての国家」への道を進んだ。生涯絶え間なく戦争を続けていたカール大帝とその息子ルートヴィヒ敬虔皇帝は、戦士としての勇武をそぞろに見えていた。一方で、キリスト教による世界秩序を望んでいた。その結果として、フランク王国という現実の支配領域を、修道院スタッフを行政ブレーンとすることで、キリスト教的価値観の充溢する世界へと書き換えたのである。私たちは、修道院の急増も、カロリング・ルネサンスも、ベネディクト戒律の徹底も、ザンクト・ガレン修道院の平面図も、カロリング王家による一連の改革運動の流れのなかでの出来事であると理解することができる。

ザンクト・ヨハン修道院に戻つてこよう。何十人、

何百人の修道士が生活をするわけではないザンクト・ヨハン修道院は、初期中世の修道院組織において、必ずしも大きな役割を果たしていたわけではない。人里離れた山村にひつそりとたち、史料のなかにもわずかな証言のみを残す、言って見れば、初期中世の大修道院からすれば、ささやかな規模の修道院である。

しかしここで私たちは逆に考えてみたい。ライヘナウやザンクト・ガレンのような巨大修道院は、確かに王族などがスタッフとして送り込まれる、統治の重要な拠点であった。しかし、祈禱兄弟盟約で見た

ように、この時代の修道院は、孤立しているように見えて、そうではない。ネットワークでつながつているのである。修道士は原則として最初に入所した修道院で生涯過ごすことを推奨されるが、実際には、優秀な修道士であるほどに、あちこちを移動し、教師として、学者として、行政スタッフとして、さらには修道院を経営する長としてその才能を發揮した。ザンクト・ヨハン修道院も、ミュスタイアという地域の文化を育む個性を持つ一方で、その修道院ネットワークを構成する一部でもあった。

カール大帝がこの辺境にザンクト・ヨハン修道院を建立したのは、ただ修道士の居場所を作るという目的だけではない。信仰共同体としてのフランク王国という、一種の王道築土を王国全体に行き渡らせるために、である。現在失われてしまつた数多の修道院も考慮に入れれば、ザンクト・ヨハン修道院のような何百もの小さな修道院が、フランク王国を埋め尽くしていた。私たちは、当時の榮華を伝えるザンクト・ヨハン修道院を通じて、一二〇〇年前の「信仰共同体としてのフランク王国」を、まぶたの裏に思い描くことができるのである。